

# 回差点

十一月の満月の夜、私は北京空港に降り立った。六十数年前、二十歳の父は鉄道隊で出征し、青年時代の六年間を北京で生きた。十二月八日の真珠湾奇襲の開戦日も、八月十五日の敗戦もそこで迎えた。父は、野間宏の小説『真空地帯』と同じと言うだけで、

多くは語らず、

後に母から聞いた。最もうれしかったことは事務室要員に転属されたことで、

それが三度の死線を越えることとなった。

後に私の伯父

となる同年の親友は映画「戦場に架ける橋」の舞台であるビルマのクワイ河で泰緬(たいめん)鉄道に、父は黄河で架橋鉄道工事に携わった。完成直前、事務室に戻るや爆撃で橋も隊員も木っ端みじんとなる。遺骨を持ち、日本へ帰る。今はもう、この叔父だけ

## 北京の月

還の役目を負うが、寸前に中国に残る命令が下る。しかし

船は日本に着くことなく海に消えた。

最年長の伯父は、父島での撃沈と硫黄島での玉砕の中、二度の生還を果たした。最年少の叔父は横浜で勤労学徒で

が生き証人である。「幽冥(ゆうめい)は天が分かつ」と父は言っていた。親があつて私やいとこたちが生まれ、子供たちは当時の祖父と同じ青年時代を超えつつある。授かった大切な生命である。命の連鎖の一環を精い

つばい生きねばと誓った北京の旅であった。心に残るのは美しい石の橋、月の名勝、盧溝橋である。七十年前そこから日中全面戦争が始まったとは、幻か夢のようであった。オリンピックを目前に、発展を急ぐつち音と排ガスであろうか、北京の空は曇っていた。でも、はるか上空に変わることなく輝く月は不思議に澄んでいた。人は生かされて、誰もが平和に生きねばと思う。物も心も破壊の真空地帯を生み、生命の連鎖を断つ戦争は、今も同じである。世界人類が平和でありますようにと祈る。

(波田町、古畑博子、59歳)